

その空白が存在に

中嶋嶺雄

木田夫人が御逝去された八月十三日のそのちょうど一周忌に当る日、日本を発つことになった私は、文部省科学研究費による、現代中国に関する日仏共同研究のために、今、パリに滞在している。夏休み中でもあるので、公立中学校の理科教諭である妻も、私たちとの共通の友人であるフランス人学者夫妻に招かれて同行しているのだが、道中私たちは木田御夫妻のあの睦まじいお姿をしばしば想い起し、また、その面影を偲んで語り合い、こうして私たちが連れ立って旅していることを相済まない気持ちにもとらわれながら、この筆を執ることとなった。

御夫人の小枝子さんとは、音楽文化同好会などでしばしばお会いしたのだが、いつも控え目に御主人に寄り添っておられたにもかかわらず、木田さんの交友関係をすべて見透されてその役割を果たされているという雰囲気私たちに強く印象づけていた。眼鏡の奥のお優しい眼差しも忘れがたく、そこには教育的環境のなかで育くまれた知性がおのずとにじみ出ている。たしか、ピ

アノもお上手だということ承っていただけに、一度その演奏をお聴きしたかったのだが、御主人の音楽好きは、小枝子夫人の影響によるところも大きかったのではなからうか。

木田さんの御家庭のことは、私共必ずしも詳らかにしていないが、小枝子夫人の存在の大きさは、御逝去によってますます広がり深まるという感じを私たちも禁じ得ない。一周忌を過ぎた今日、改めて御冥福をお祈りするものである。同時に私のような大学人にとって、かけがえのない存在である木田さんが、今後も益々御活躍され、木田さんの念願である大学院中心の大学教育の再編が、国家百年の大計として一日も早く実現するよう私たち自身でもって努力することが、あれほど真摯に、かつ誠実に御主人を支えられた故小枝子夫人にたいする御供養になるのではないかと、改めて襟を正さねばならないような、そうした存在でも、小枝子さんはあったと思う。

(木田さんを通じ、音楽文化同好会などでしばしばお会いし、お話しさせていただきました 東京外国語大学教授)